典型集落・野尻における居住空間変化と条里地割集落の居住域について

ー 近江平野野洲川下流域における条里地割と平地集落の空間形成に関する研究 その 3 ー

SPATIAL TRANSITION OF RESIDENTIAL AREA OF PLAIN VILLAGES WITH
LAND ALLOTMENT OF JYORI-GRID SYSTEM FOCUSING ON NOJIRI,
THE TYPICAL PLAIN VILLAGEー Study on the land allotment of Jyori-grid system and the area formation of typical plain village
on the lower reaches of Yasu river in Oumi plain Part 3 ー

秦 憲志*, 桜井康宏**

Kazuyuki HATA and Yasuhiro SAKURAI

This study aims to clarify how the plain villages on the lower reaches of Yasu river had formed. Especially, the spatial transition of residential area with land allotment of Jyori-grid system is focused. The main conclusions are as follows. Although the urbanization has progressed, the traditional structure of the spatial forms is maintained because they are surrounded by preserved farmlands, roads have planned along the edges of Jyori-grid, and, the waterways are preserved in their original routes. The residential areas have been becoming dense. It has been changing with the road improvement of boundary part to the form opened outside.

Keywords: Oumi plain, Village, Area formation, Land allotment of Jyori-grid system, Spatial transition, Residential area

近江平野, 集落, 空間形成, 条里地割, 変遷, 居住空間

1. はじめに

1-1 研究の背景と目的

本研究は近江平野の中でも条里地割が卓越し、その遺構が今日までよく残っている滋賀県野洲川下流域、旧栗太郡北東部地域を対象として、条里地割による平地集落の空間構造とその形成原理を明らかにするものである。

前々稿では、明治・大正期の地域空間の姿を復元し、地域レベル、集落レベル、居住域レベルと段階的に用水の状況を把握するとともに、居住域を中心とする土地利用の分析を行い、居住域の空間構造をモデル化した。その結果、集落居住域は神社、藪、畑地等から構成され、村を守る役割を果たす「守りの空間装置」が入口部に位置し、居住域を囲むように水路が配され、水をうまく制御しながら領域が形成されていること等を明らかにした^{注1)}。

前稿では、典型集落・野尻の明治期の姿を再現し、家屋敷の特性を分析するとともに条里地割を踏まえた「基本ブロック」の考え方を導入し、集落居住域の構成原理を検討した。その結果、住家の方向や間取り、小家の配置の仕方等、屋敷配置は道路アクセスを含めた敷地形態や水路との関係によって一定決まってくる、規則性を持った個々の屋敷配置が、「基本ブロック」のような連続してつながるしくみを持つことで、集落全体としての統一性を形づくっていること等を明らかにした^{注2)}。

このように、これまでは明治・大正期の資料によって近代化による大きな環境変化が起こる前の集落の姿を明らかにすることに力点

を置いてきた。特に明治期に焦点をあてている理由は、新しい土地制度の導入により数度にわたって地籍図が作成され、今日から遡って調べることのできる統一的かつ明治期以前の姿が投影された地図資料が得られると考えたからである。

第3段階として本稿では、第一に、前稿で取り上げた典型集落・野尻について、居住域内部の居住空間のその後の変化を明らかにする。第二に、集落の居住域が市街化圧力という外的要因にどのように対応しているのかを検討するが、その際、後述のように野尻は居住域とその周辺の農地が土地利用規制により守られているため、異なる土地利用区分が設定された他の2集落の変遷を確認しながら、居住域のまとまりがどのように維持されているのかを検討する。

なおここでの典型集落に関して、筆者らは明治期の滋賀県全域における平地集落の典型的な姿を明らかにしており^{注3)}、規模が30～40町歩で約600m四方、屋敷を中心とする居住域が2町弱四方、戸数40戸前後で家屋敷が塊って存在し、道路・水路により区画されたグリッド状の条里地割を踏襲したものをひとつの典型パターンとしている。前々稿では、対象地域における集落の規模と形状、居住域の形態、資料の有無を考慮し、8つの典型的集落を選定し検討を行っている。

1-2 研究の位置づけ

建築・都市計画分野において、近年、集落の歴史的形成過程を重視し、集落の空間構造の把握や空間形成の原理の解明、集落空間の変遷を明らかにしようとする研究が成果を上げてきている。たとえ

* 滋賀県立大学地域共生センター 専門調査研究員・工修

** 福井大学 名誉教授・工博

Research Specialist, Center for Community Co-Design, Univ. of Shiga Pref., M. Eng.
Prof. Emeritus, Fukui Univ., Dr. Eng.

ば、牛島らは有明海沿岸地域における干拓村落を対象として、現地調査と史資料をもとに村落の形成プロセスと居住空間の特性の違いを分析し、列状村落の多様な形態の背後にある居住地形成のしくみを明らかにしている^{注4)}。また麻生らは、伝統的な農村集落を対象に明治期から今日までの空間構成の変遷を主に土地利用と農地管理の面から分析し、景観保全の課題を抽出している^{注5)}。山崎は、地域の持続性を命題とし、災害被災集落における個別世帯の居住動向と集落空間の変容との関係を経年的に分析し、地域空間管理の課題と課題解決の方向性を示している^{注6)}。いずれも歴史的資料や地図、空中写真等を活用し、現地調査を行い集落空間の変遷を分析している。本研究では、これらの手法を参考としつつ、さらに明治期の集落の個別の家屋数の状況がわかる図面・家屋敷図をもとに復元した集落居住域のその後の変遷を追いつつ、さらに明治期の集落の居住域内部の変化を、明治期を基点に今日までみている点において、また近年の都市化の進展とこのような居住域の変化の対応関係を追っている点に特色がある。一方、近江平野の条里地割に関しては数多くの歴史地理学分野の研究が行われており^{注7)}、建築学・空間計画の立場からは山森が近江湖東平野において条里空間の圃場の地割区画の復元を試み、条里空間形成のシナリオを提起している^{注8)}が、居住域形成のしくみやその変遷については扱われていない。

1-3 研究の方法

次の二つの視点からアプローチする。

①明治期の姿を再現した典型集落・野尻の居住域および家屋敷の変遷過程を明らかにし、居住域内部からの変化の方向を検討する。
②野尻とは異なる土地利用区分が設定された2集落（北中小路、伊勢（両集落とも前々稿で検討した8つの典型的集落に含まれる））について、道路整備や都市化の進展等、外的要因に対応した集落空間の変遷過程を明らかにする。

①については、屋敷図から明治期の集落・家屋敷の状況がわかることから、それをもとに、今日までの家屋敷と集落の変化を調査した。調査時期は2000年10～12月であり^{注9)}、その後の変化を随時、確認している。調査結果をもとに、空中写真を活用しながら集落図を作成する。集落図は、国土地理院の空中写真画像データが入手できることと、時代的意味を考慮し、次の4つの年代のものを作成した。「1961年」：地域環境が大きく変わっていく前の姿を示す。「1975年」：高度経済成長の影響を受け、変化してきた集落の姿を示す^{注10)}。「1987年」：経済活動が再び拡大していく時期にあたり、今日までの移行期の状況を示す。「2008年」：直近の集落の姿を示す。

②については、空中写真と地形図を活用して野尻と他の2集落の変遷をみていく。また現地調査、集落ごとの資料や町史^{注11)}、道路の整備状況資料^{注12)}等により開発状況を把握する。

①、②で活用した空中写真、地図等の資料は表1のとおりである。野尻については、他の空中写真^{注13)}と住宅地図^{注14)}も活用した。

2. 対象地域と集落概要

対象地域は前稿、前々稿と同じ滋賀県野洲川下流域、旧栗太郡北部地域である。この地域は、滋賀県の中でも戦後、高度経済成長期を経て、急速に都市化した地域である。国道1号、8号が通過し、1963年、名神高速道路栗東尼崎間が開通し、栗東IC営業開始。翌年、全線開通したことにより地域開発の基盤がいち早く整えられ、

表1 活用資料

	時期	縮尺	出典、画像番号、参照エリア	使用目的
空中写真	1961/5/22撮影	1/10,000	(財)日本地図センター 国土地理院画像データ(空中写真は以下同) MKK615-C27-6731「野尻」「伊勢」 MKK615-C27-6733「北中小路」	手法①
	1975/9/11撮影	1/10,000	CKK759-C32-8「野尻」「伊勢」「北中小路」	「北中小路」「伊勢」は手法②の参照
	1987/9/20撮影	1/10,000	CKK871-C5B-9「野尻」	
	2008/5/6撮影	1/10,000	CKK20081-C15B-37「野尻」	
地形図	1969(昭和44)年 1998(平成10)年	1/2,500	栗東市所蔵白図「野尻」「伊勢」「北中小路」	現地調査、集落図作成等
	2010(平成22)年 2004(平成16)年	1/2,500	栗東市HP公開図面「野尻」「北中小路」「伊勢」	
	1977(昭和52)年 1993(平成5)年	1/10,000	守山市所蔵白図「野尻」「伊勢」「北中小路」	手法②「野尻」は集落全体の動向把握
	2010(平成22)年 2012(平成24)年	1/10,000	栗東市所蔵白図「野尻」「北中小路」 守山市所蔵白図「伊勢」	
	1976(昭和51)年測量 1975(昭和50)年測量	1/25,000	国土地理院地図 野洲 同 草津	位置図

行政の都市計画の取り組みも早くから始まっている^{注15)}。

図1は対象地域と3つの対象集落（野尻、北中小路（ともに栗東市）、伊勢（守山市））の位置を示す。それぞれの既存の居住域の部分を○印で示す。ベースの地形図は都市計画の線引き（1972年）直後のものである。この時点でJR栗東駅は存在しないが位置を明記している。また、市街化調整区域を網掛表示している。

3集落の土地利用区分は表2に示すように、野尻が居住域とその周辺の農地が市街化調整区域で他は市街化区域、北中小路は居住域とその周辺が市街化区域で他は市街化調整区域、伊勢は全城市街化区域である。3集落の周囲には古くからの街道である旧中山道を中心に北と南に地域の東西をつなぐ主要道路（図1のア、イ）が、また西側に南北の主要道路（同ウ）が走り、条里地割に沿ったシンプルな道路構造が地域の骨格となっている。

図2は1961年の対象集落と周辺の空中写真である。中山道の旧街道筋に形成された町場とその周囲に広がる農村集落の風景は明治以降この時期まで大きく変わっていない。条里地割に基づく計画的な道路、水路の骨格と連担した面的な農地が広がり、居住域が集約した集村の集落形態がよく保持されている。北中小路、伊勢、野尻とも居住域の回りに水路、神社、竹林・藪などが配され、居住域の境界をはっきりとしている。集落の形状は南北軸が真北より約33度東に傾き、北中小路は東西9町南北4町の長方形、伊勢、野尻は東西6町南北6町の正方形で、面積は約36町歩で共通している。

なお農地については、慢性的な用水不足を解消するため、国営野洲川土地改良事業（1947～1955年）により、野洲川ダムや石部頭

図1 対象集落位置図 1/125,000 0 1 2 3 km

表2 対象集落の地域特性

	居住域の形態	都市計画の土地利用計画区分・土地利用規制
1.野尻	グリッド型+湾曲型	居住域とその周辺の農地が市街化調整区域、他の農地は市街化区域(工業地域)
2.北中小路	グリッド型	東側の東西3町・南北4町の居住域が含まれるエリアが市街化区域、他、西側の農地は市街化調整区域
3.伊勢	グリッド型	全域市街化区域

□世帯数の推移 ※1878年は遊覧県物産誌、1965年以降は国勢調査

	1878 (M11)	1965 (S40)	1970 (S45)	1975 (S50)	1980 (S55)	1985 (S60)	1990 (H2)	1995 (H7)	2000 (H12)	2005 (H17)	2010 (H22)
1.野尻	42	49	53	55	57	54	59	59	195	523	538
2.北中小路	35	48	79	97	149	176	174	236	299	335	339
3.伊勢	35	45	45	80	236	278	376	514	796	1030	1126

□農家数の推移 ※世界農林業センサス。2010年は経営体数

	1960 (S35)	1970 (S45)	1980 (S55)	1990 (H2)	2000 (H12)	2010 (H22)
1.野尻	38	39	40	37	27	9
2.北中小路	38	39	38	32	29	25
3.伊勢	36	36	35	32	27	10

首工などの水利施設が整備されている。

表2より世帯の動向をみると、明治期においては3集落とも40戸前後であり、1960年代までは微増程度で安定的に推移している。その後、北中小路は1970年に増え始め(寮・社宅による)、1980年代以降も緩やかな増加傾向を示している。伊勢はやや遅れて1975年以降に増え始め、1991年の栗東駅開業以降、一段と増加している。野尻は1995年までは55戸前後とほとんど変わっていないが、2000年に約200世帯、2005年には500世帯以上と大幅に増えている。これは、栗東駅前土地区画整理事業が進み、野尻地先も一部エリアに含まれ、アパート、マンション等の建設が進んだためである。

この間の農家数の推移をみると、3集落とも1980年までは約40戸弱でほぼ変化なく推移しているが、1980年代以降減少に転じている。とくに野尻と伊勢での減少が顕著で、2010年にはともに10戸程度となっている。一方、農地が調整区域に属する北中小路では20戸以上を維持している。

以上より、住宅地整備の動きは昭和50年代以降に本格化しており、JR栗東駅の開業とともに都市基盤整備が進み、さらに都市化が進展していることが確認できる。これにより、前述した①②の二つの視点のうち②の比較時点を、1961年以降、昭和50年代はじめの「1977年」とJR栗東駅開業後の「1993年」、そして直近の「2012年」とすることとした。

3. 典型集落・野尻における居住空間変化

3-1 地域整備の動向

野尻集落は豊富な地下水に恵まれ、その水を求めて1960年に積水化学(株)栗東工場が進出している。地域整備の動向を道路の面からみると図3-1の(ア)、(イ)、

(ウ)が1961年まで(エ)が1972年までに整備され、集落の居住域と外部とをつなぐ道路が整備されている。その後、中の井川に沿った

図3-1 1977(昭和52)年

図3-2 1993(平成5)年

図3 野尻の全体の変遷

図3-3 2012(平成24)年 (※南1/3の部分は地図の境界にあたり、作成年代が異なるため貼り付けていない。大半は積水の工場が占める)

図2 1961(昭和36)年の対象集落及び周辺の状況

1/10,000×0.67(≒1/15,000) 出典: 国土地理院画像データ MKK615-C27-6731、MKK615-C27-6733を合成し集落域を加筆

道路（オ）が1977年までに整備されている。

続く図3-2の1993年では、中の井川に沿った道路が北に延伸整備され、居住域西側の境界部の道路が拡幅整備されている。土地利用面では工場等の立地が集落居住域の南側で少しみられるが、市街化区域の部分においても、まとまった農地が保全され条里地割を踏まえた集落の形態がよく保たれている。これ以降、JR 栗東駅の開業による駅前土地区画整理事業や駅前開発事業による駅周辺整備（1998年度末 完成）に伴って2000年以降、急激に都市化が進行し、街路整備や上物整備が進んでいった（図3-3）。

3-2 居住域内部の変化

居住域内部がどう変化しているか、「農地・宅地」、「家屋敷」、「道路」、「水路・池」について経年的にみていく。

まず明治期の集落居住域とその周辺の土地利用の状況を示した（図4）^{注16）}。それ以降の変化について、前述①の4つの時点の集落の状況を図5（1961年）、図6（1975年）、図7（1987年）、図8（2008年）に示した。図中の番号は、明治期の村屋敷図の屋敷番号（また後掲する表4の屋敷番号）に対応している。また、図5において網掛建物は明治期の村屋敷図の建物が1961年時点で存在しているものである。一方、図6～8の網掛は、比較年代のそれぞれの期間に改築あるいは新築したものを示している。

（1）農地・宅地の動向

1) 宅地割り・農地区割り

図4と図5を比較して、明治期と1961年では居住域内部の宅地割りや周辺農地の区割りはほとんど変わっていない。また図6、図7の時点においても宅地割りや居住域内部の農地（屋敷No.36の南側やNo.37～45の南側に存在する）および周囲の農地の状況に変化はなく、良好に保持されている。

ところが図8の時点においては、中ノ井川改修整備（下流から進められ、この時点ではほぼ完了）に伴い、集落内南側の道路が大幅に拡幅整備されたことで農地が減少し、環境が著しく変化している。

2) 居住域内土地利用

居住域内の土地利用については、明治期の地籍図で畑のところには図5では家が建ってきている（図5の屋

敷番号5、7、新2など）。エリア的には中央南北道路より東側地区で住宅等の建設が進んでいる。これは、東側地区は西側に比べ農地や藪等の空隙地部分が多く残っていたためと推察される。全体的に図5時点でかなり建て詰まっているが、空中写真から居住域内に畑地が残っており宅地内でも畑利用が多くなされており、多様で密度の濃い土地利用がなされていることが確認できる。

3) 居住域周辺

居住域周辺への住宅の広がり、工場立地に伴う南側での宅地化を除けば、図5時点では明治期と同じエリア内に収まっており、図6時点で、南北の道路の北側と、西側の農地への一部にじみ出しが見られる。その後安定して推移しているが、近年、建築活動が活性化するのに伴い、No14が北側に新築しているように（図8）、居住域の形態が従来の枠組みの中では収まりきらなくなってきた。

（2）家屋敷の動向

1) 住家

住家の変遷の一覧を次々頁・表4に整理している。ここで、それぞれの時代区分の間の住宅更新のパターンは図9のようになり、表4a～f各期間の住宅更新の状況をまとめたのが表3である。

まず、明治中期から1961年までの変化をみる。表3より明治期の村屋敷図のまま残っているのが12例ある（表4ではb欄の①に相当し、うち3例は現在まで残っている）。この間に建替わって、間取りの変化がわかるものが13例ある。このうち1例を除いて、建物規模は維持継承あるいは拡大している。また表4（a～b）より、住家の建て方は前住宅（四つ間）を継承するとともに規模が拡大する方向にある。ヒアリングから、昭和30年代ごろまでは建築材料は貴重な時代であり、家や納屋を余所で購入してきて建替えたり、古い家の良い材料を使って建直したりしている家が多く、昔の建て方を継承するひとつの要因になっている。なおこの期間に建替わっ

図4 明治期の野尻の集落居住域及びその周辺の土地利用

図6 1975（昭和50）年の野尻の集落図 1/5,000

図7 1987（昭和62）年の野尻の集落図 1/5,000

図8 2008（平成20）年の野尻の集落図 1/5,000

図9 住宅更新のパターン

表3 住宅更新の変遷

	明治中期 ～1961年	1961～ 1975年	1975～ 1987年	1987～ 2000年	2000～ 2008年
期首存続数	47	42	46	44	44
存続(イ)	12	27	40	37	41
維持継承	2				
規模拡大	10	7	1	4	
規模縮小	1				
規模不明	—	8	3	2	4
計(ロ)	13	15	4	6	4
新築(ハ)	6	4		1	3
不明(ニ)	11				
消滅	9	1	2	1	0
その他	2				
期末存続数	42	46	44	44	48

注1) 不明は建物の詳細が不明(明治中期～1961年は建替え実施を含む)
 1961年～は、全ての変化が把握できるため、不明は建替えの規模不明に分類
 注2) 現地調査が2000年であるため、それ以降の建替えの規模の詳細は不明
 注3) その他は用途変更等
 注3) 期末存続数=(イ)+(ロ)+(ハ)+(ニ)

た住家は新築を含め19例中10例が今日まで残っている（表4のb～fまで線が継続しているもの）。

次に1961～1975年（表4b～c期間）では、新築を含め建替わっているのが19例で全体の4割以上を占める（表3）。うち17例が今日まで残っている（表4のcを基点にfまで線が継続しているもの）。建替えの規模変化がわかるものは7例で全て拡大している。また表4（b～c）より、この期間の建替えにおいても、前住宅の形式を踏襲し四つ間が多い。

次に1975～1987年（表4c～d期間）では、表3より建替えは4例と少なくなっているが、建物内部では土間の床上げ等の改装や増改装が進んでいる（表4備考欄を参照）。さらに、平成以降の建替え・新築（表4eあるいはfで新たに出現しているもの）は14例（平成12年（2000年）以降は7件^{注17)}）あり、近年、建築活動が再び活発化しているが、表4より、従来の伝統的な四つ間ではなく、現代的なメーカー系の住宅が多く建ってきている。

2) 小家等とニワ

表4備考欄より、ハナレ、小家等の建築、改装についてヒアリングで把握できたのが20例ある。その時期については、昭和20年代以前6例（1例は他と重複）、30年代3例、40年代5例、50年代2例、60年代・平成以降5例（2例は他と重複）、不明2例となっており、昭和20年代以前を除くと、昭和40年代、60年代・平成以降が多くなっている。これは農家の内外部における生活空間の利用仕方の変化と関係していると考えられるため、具体例を通して、庭空間の利用の変化と建物等の変化をみることにする。

図10は、住家と小家等の建替えによる屋敷空間の変化を示す典型例である。明治中期の元々の住家は二つ間であったが、明治40年頃建築された前住宅のAでは四つ間となっている。ただし梁間は3.25間と狭く規模は小さい。その分、庭は広くとられ、普段は畑として野菜をつくり、秋にはムシロを並べて稲を干した。住宅には縁側が一部ついているが、当時は無いのが一般的で、下屋部分が干し

表4 野尻の家屋数の住家を中心とした推移

凡例)①—①:明治期の住家が存続 ②....②:第2世代目 ③—③:第3世代目 ④....④:第4世代目

屋敷 番号	※注1 調査 状況	変遷										備考 (ヒアリング時期はH12)			
		a			※注3	b		※注3	c		d		e	f	
		明治中期(1887年頃)				昭和36(1961)年 ※注4 形式・規模(間)×(間) 面積(坪)			昭和4 昭和50 1975年				※注3	昭和62 1987年	※注3
3	P	①	一つ間 2×3.5	7	S8	② 四つ間 4.5×5.5 1.22		②	S52	③ 四つ間 5×5.5+2.5 1.30		③	H5ハナレ建替え		
4	P	①	四つ間 3.5×5.5	19.25	S32、33	② 四つ間 4.5×7+3.5 1.35					35		②	S50年代に床上げ。Hはじめ農作業コヤ改築。さらにH7、8改築	
7	P	①	二つ間(縦) 2×4.5	9	明治期	② 四つ間 4×6 1.24	s48.49	③	四つ間 4.5×6.5+1.625		1.30.88		③		
新2	P	—			S5	新② 四つ間 4.5×5.5 24.75				H1	③ 四つ間 5×7.5+1.25 1.38.75		③	S36〜50にコヤが新築	
12	P	①	二つ間(横) 3×3.5	10.5	所有者変更 S10以前	② 四つ間 3.5×6 1.21				H5	③ 3.88 4.5×7.25+1.25		③	S48ハナレ建替。前住宅は印刷場併設。S30頃改築。	
13	P	①	二つ間(縦) 2×4 ※注2	8	S16以前 S23	③ 四つ間 4×5 1.20					44.88		③	S55頃コヤを改築。台所床上げ。前住宅はザシキが3畳と6畳	
14	P	① M初期以前	六つ間 4×8	32							52.25		①	H2頃、屋根にトタン。改築はS55頃、ニワを床上げ。ウマヤを子ども部屋に。コヤは増築(80年未満)	
15	P	① 江戸期	四つ間 4.5×7	31.5		①	(S35頃)	②	四つ間 4.5×7.5+4.75		1.38.5		②	H4〜5に床上げ。前住宅をS35頃、取り壊す。築300年ぐらゐ。北側のコヤはS40年頃建替え	
19	P	①	四つ間 3.5×6.5	22.75	S初期以前	② 四つ間 4×6.5 1.26	S45	③	四つ間 5×6.5+7		1.39.5		③	S34、35頃ハナレ建替。近年1階部分を改築	
20	P	①	四つ間 4×6	24		①	(S35頃)	②	家形四つ間 4.5×7+3.75		1.35.25		②	S2ハナレ築。コヤを北に曳いた	
24	P	① M初期以前	四つ間 4×7	28		①		②	四つ間 3.5×7+6.75		1.31.25		②	S50年に床上げ。コヤのころは、農作業コヤがあった。	
25	P	①	四つ間+1 3.5×6.5+4.5	27.25	S5頃	② 四つ間 4.5×7.5 1.33.75	S42				55.25		②	農作業。S48、49頃、床上げ。ハナレ(ガレージ)はS42、43頃建替。他ハナレはS60頃改築	
27	P	① M初期以前	四つ間 4×6	24		①	S44	②	四つ間 4.5×6		1.27		②	前住宅は音家を購入。S36〜37頃まで牛小家。後に改造して物置に。コヤはT9築	
28	P	① M初期以前	四つ間 4×6	24			別敷地 新築S40	新②	四つ間 7×4+1		コヤ 27		②	コヤ	
29	P	① M初期	四つ間 3.5×6.5	22.75							49.5		①	余所から購入。S19、20頃、下屋増築。直近年に一部改築	
34	P	①	四つ間 3.5×6	21	S31	② 四つ間 3.5×6 1.21				H5	1.50.51 ③	四つ間、中廊下	③	前住宅は、古い家の良い材料を使って建替え。ハナレ、コヤはS40頃。外便所はS29建替	
36	P	①	四つ間 4×7	28	S20以降	② 四つ間 3.5×6.5 1.22.75				H12	1.28.75 ③	メーカ系	③	前住宅はS43頃に改築。ウマヤを物入れに、縁側増築。コヤはS19頃建替え。ハナレはS60頃	
37	P	①	四つ間 4×6	24	M〜T期	② 四つ間 4×6を基に増改築					58		②	離れ(2階)・農作業コヤ(1階)をS52に増築。本宅RC造部分をS53頃に改築。床上げはS52〜55	
38	P	①	四つ間 3.5×6	21		①	(S34〜35)	②	四つ間 4×7.75+7.94		1.38.94		②	水回VRC造で改築。ハナレはH3以降に建替え。コヤは築約50年	
39	P	①	二つ間(縦) 2×6 ※注2	12	M40頃、S34	③ 四つ間 4.5×7 1.31.5					31.5		③	S50頃、床上げ。2階に部屋を。コヤS42に建替え。前住宅は四つ間3.25×7=22.75に片縁側	
41	P	①	二つ間(縦) 2×5	10	S14頃	② 四つ間(空中写真) 1				H2	③ 四つ間 5×8.5+6.75 49.25		③	前住宅は古家を購入。ハナレはS40築(専家)。隣地購入	
42	P	M10頃 ①	四つ間 4×7	28							35		①	S55以前に屋根葺き替え。S50代初め床上げ。牛小家S33ぐらゐまで。コヤ、物入れはS35頃に建替え	
43	P	①	四つ間 3×5	15	S33	② 四つ間 4×7+1.75 29.75					29.75		②	床上げS62。2階部をS45増築	
48	P	明治期 48より転出			S32	新② 四つ間 4.5×7 31.5					31.5		②	S50代に床上げ。土間の一部、カマド、煙出しは今も残っている。2階は物入れを部屋に	
5	H	①	四つ間 3×5	15		不②		③	—	③	転出	駐車場	—	12と一体	
6	H	①	一つ間 2×3	6		—		—	—	—	—	—	—	S40頃にハナレを建替え。6畳のハナレはS32、33頃	
10	H	①	一つ間 2×3	6	終戦後	不②		②	S53	③	—	—	③	14番屋敷のコヤが建つ所有者は5番屋敷と同じ	
11	H	①	二つ間(縦) 2×4.5	9	所有者変更	コヤ		コヤ	コヤ	コヤ	17.5		コヤ	コヤはS2建替え。他のコヤ、土蔵とも古い。H12に別棟を新築	
新3	H	—			コヤ			コヤ	コヤ	コヤ	—		③	コヤはS2建替え。他のコヤ、土蔵とも古い。H12に別棟を新築	
16	H	①	四つ間 3.5×6.5	22.75		①	S30代	②		②	メーカ系		④	コヤはS2建替え。他のコヤ、土蔵とも古い。H12に別棟を新築	
17	H	①	一つ間 2×3.5	7	煙			煙	煙	ガレージ			ガレージ	購入してきた	
19	H	コヤ	コヤ 2×3.5	7	S8以前	コヤ		コヤ	コヤ	コヤ			コヤ	大工道具小家	
20	H	コヤ	コヤ 1.5×2	3	M40代	コヤ		コヤ	コヤ	コヤ	15		コヤ		
21	H	①	四つ間 4×7.5	30	所有者変更	煙		新②	煙	ソーコ	ソーコ		②		
31	H	①	四つ間 3×4.5	13.5		①	転出	煙	ソーコ	ソーコ			②		
32	H	①	一つ間 2×3	6	煙			煙	煙	煙			煙		
40	H	①	一つ間 2×3 ※注2	6	—	—		—	—	—			—	38番屋敷の敷地と一体化	
44	H	①	四つ間 3×6	18	ソーコ			ソーコ	ソーコ	ソーコ			ソーコ		
46	H	①	四つ間 4×7	28	所有者変更 S5	不②	S47	③	—	—			③		
1	—	①	四つ間 4×6	24		①	所有者変更	②					②		
2	—	①	二つ間(横) 2×2.5	5		—		—	—	—			—		
8	—	①	二つ間 2×4.5	9		—		—	—	—			—		
9	—	①	二つ間 2×3	6		—		—	—	—			—		
18	—	①	四つ間 3×6	18	煙			煙	煙	煙			ガレージ		
33	—	①	一つ間 2×3.5	7	不②			②	煙	煙	煙		煙		
1	x	—			田		1より転出	新②					②		
新1	x	—			新②								②		
新8	x	—			煙			新②					②	S50〜62増築。S62〜H20一部改築。H12以降、別棟を新築	
新4	x	—			新②			②		③			③		
新5	x	—			コヤ			コヤ	コヤ	コヤ			コヤ	所有者は14番屋敷と同じ。	
22	x	①	二つ間(縦) 2×5	10	所有者変更	不②				②			③		
23	x	①	四つ間+1 3.5×6+2	23		不②		②		③			③		
30	x	①	一つ間 2×5.5	11		不②							②	178番地と一体的に利用。直近年に、178番地の別棟を建替え	
35	x	①	一つ間 2.5×4.5	11.25		不②		③					③		
新6	x	—			新②			②		③			③		
45	x	①	四つ間(+増築)3.5×6	21		不②		③					③		
47	x	①	二つ間(横) 2.5×5	12.5		不②							②		
新7	x	—			新②						②		④		
48	x	①	四つ間 3.5×6	21		不②		③					③		
住家の戸数			47			42		46		44		44	48		

※注1 P:プラン調査実施(グレーの塗りつぶし部) H:ヒアリング調査実施 - :調査不能 ×:未調査

※注2 一部寸法が記載されていない、あるいは誤りと思われるため、屋敷図より推定。

※注3 建築時期はヒアリングより。()書きは、空中写真で確認し、少しズレがあるもの。

※注4 丸数字横 新:新築 不:プラン調査が未実施のため建物の詳細が不明

※注5 1:規模拡大 ←:維持継承 ↓:規模縮小 記号なし:同一建物、新築、変化不明

※注6 住家の一階床面積 ※注7 メーカ系:現代的なメーカ系の住宅

図 10 住家と屋敷空間の変化（典型事例：No39）

た扱を夜間に一時取り入れる場所であった。プランの聞き取り調査より、昭和 30 年代頃までは縁側のついていない住宅が多いことが確認できた^{注 18)}。小家は昭和 42 年に B のように建替えられているが、扱すりなどの作業場や農機具置場で、一部はハナレになっていた。一方、B の現住宅（昭和 34 年築）は四つ間で、梁間は 4.5 間で規模が拡大し、縁側もザシキとデいの両方の部分にとられている。昭和 50 年頃に改装し、土間を床上げして、玄関、台所、浴室、応接間を整備、2 階ツシ部分を居室化している。このように、農業の機械化が進む前までは、農作業空間が重視され敷地内の庭が広くとられて、畑や作業空間として多様で効率の高い利用が図られていた。

(3) 道路

1975～1987 年の間に西側の農地との境界部の道路が 4m 以上に拡幅整備されている（図 7）。居住域内部の道路幅員は昔のままの 2m 前後であり、車でのアクセス向上や住宅の建替えのための前面道路幅員確保などへ対応するものと思われる。前稿で述べたように、居住域西側敷地の屋敷配置^{注 19)}とそれが連続した居住域全体の形態的特性として、西に閉じ東に開いた空間を形成してきた。このような外に閉じた形態をこの時点まで守ってきたが、この道路整備によって西側からの車でのアクセスが容易になり、外に開いた形へと大きく変化していくことになる。2000 年には、この道路沿いに新しい自治会館が建設されている（図 8）。元の公民館は、1971 年に集落の中心部、観音堂の横に建てられている。

続く 1987～2008 年の期間では、2000～2008 年に中の井川の河川改修に併せて、集落南側の道路が大幅に拡幅整備され、居住域を取り巻く環境は大きく変化している（図 8）。

(4) 水路・池

明治中期より 1961 年まで、湧水池は「オイノ池」「シズノ池」「テンド池」の他、湧水 1 ヲ所が存在していた（図 5）。また中ノ井川後背地の水路内にトリ水（飲料用）の親井戸が 3 ヲ所あった。上水は、江戸時代より昭和 30 年代中頃まで、中ノ井沿いの 4 ヲ所の親井戸・池から各家庭に給水していた。取水方法は川や道、屋敷内をたち割

り（堀り）、竹の節をくり抜いたパイプで各戸の井戸に水をひいていた。ジョイント部は松材を使つてつないでいた^{注 20)}。

湧水池は、野尻および下流集落の農業用水として利用され、「オイノ池」は野尻、「シズノ池」（三枝井の水源）は北中小路、「テンド池」（保養用水）は繕が水利権を有している。1969 年の 1/2,500 地形図にも、これら 3 つの湧水池が表示されている。これらの湧水は、工場立地によって水量が減少し、今は「テンド池」のみが残っている。

湧水池がなくなることで、たとえばシズノ池は下流の北中小路の農業用水の水源であり、なおかつ野尻の居住域北側の境界を形成する水路の水源であったが、図 5 から図 6 への変化では、居住域北側境界部の水路は北東の竹林部北側の水路からがメインの流れに変化しており、水路に囲まれた居住域の形態が一部変化することになっている。

3-3 まとめ

集落居住域の変化の方向として次の 4 つの側面が明らかとなった。

- ① 1975（昭和 50）年頃までに建替え、新築された住家が多く、建て方は前住宅（四つ間）を踏襲し、全体として規模拡大している。昭和 50 年代になると、土間の床上げ等の改装や増改築が進んでいる。近年、建築活動が再び活発化しているが、従来のような伝統的な四つ間形式ではなく現代的なメーカー系の住宅が多くなってきている。
- ② 農業の機械化（乾燥機の導入）により、庭でのモミの天日干しが必要でなくなり、軒下、下屋部分への収納も不要になる。そのことが住宅の縁側が形成・拡大する一因となっている。住家の規模拡大とともに小家・ハナレ等の建替えも進み、外部空間が縮小する方向に向かっている。
- ③ 境界部での道路整備が進み、外からのアクセスが容易になることで、外に閉じていた居住域の形態が外に開く形へと大きく変化してきている。湧水等の水環境の変化も、居住域の形態を変化させる要因となっている。
- ④ 居住域内部での建替えが進む一方で、近年、周辺部へのにじみ出しが見られるようになる。そして、居住域の形態が従来の枠組みの中で収まりきらなくなってきた

4. 他の 2 集落にみる市街化圧力への対応

ここでは、野尻とは違って居住域が市街化区域内にある 2 集落について、居住域とその周辺の農地の動向に着目してみていく。

4-1 北中小路

居住域は集落の北東寄り東西 1 町余り南北 2 町余りのエリアに集約され、北側、東側、西側を流れる用水が境界を形づくっている。明治期の土地利用の状況を図 11-1 に示す^{注 16)}。

集落の変化をみる。図 11-2 は図 2 の居住域の部分を拡大トレースしたものであるが、明治期と比較して 1961 年では、宅地割りや土地利用、周りの農地の区割りもほとんど変わっていない（図 11-1 と同様に、居住域内にほぼ全ての住家が収まっている）。家屋敷の配置を詳細にみると、集落西側は境界の水路に沿って全ての屋敷で住家が南北配置、北側は水路に沿って住家が東西配置となっており、居住域全体として西と北に閉じ、東と南に開かれた空間を形成することになっている。これは前稿でみた典型集落・野尻の居住域の空間構成と同様の構造となっている。居住域内部の土地利用の状況は

明治期と同様、一部に水田・農地が存在し、規模の大きな家が多いが、それ程、建て詰まっていない。

図 11-1
明治期の土地利用

次に、昭和 50 年代はじめの集落全体の状況を図 11-3 に示す。この時期までに整備された道路をラインで、また居住域のエリアを破線で示している。居住域とその周辺の農地においては、居住域西側や南側農地での宅地開発関連の道路整備が進んでいる他、居住域内および境界部の道路整備が見られる。現在の道路台帳付図より、集落内の道路は 4m 以上に拡張されていると思われる箇所が、当該ライン部や東境界部の道路で見られるが、その他は 4m 未満である。また、都市計画道路が居住域の東側に条里地割に沿って計画されている。ちなみに、昭和 50 年代はじめの居住域およびその周辺における宅地整備や宅地化の進展について別途、詳しくみると注 21)、居住域内では野尻と同様、多くの建替えが行われている。

さらにその後の変化を、図 11-4 (1993 年)、図 11-5 (2012 年) よりみる。居住域のエリアを破線で、新たに整備された道路を濃いライン (薄いラインは整備済み道路) で示している。1993 年時点では、居住域東側の都市計画道路が整備され、沿道に住宅地開発が進んできている。既存の集落居住域の部分と周辺の開発部分が連担してきているが、既存集落の形態はよく保持されている。居住域西側では、小規模な住宅地宅地開発が、先行する宅地開発とつながる形で行われている。その後、2012 年では同様の傾向で宅地化が進んでいるが、既存の居住域のグリッドタイプの基本的構造は変わっておらず、条里集落の景観をよく留めている。その要因として北側、東側、西側の境界の水路がこれまで通り保持され、周りとの境界が明確になっていることが挙げられる。一方、道路に注目するとグリッドタイプの条里地割の枠組みに整合する形で新しい住宅地が計画されており、既存の居住域への周辺からのアクセスがよくなっている。

4-2 伊勢

居住域は集落の南東寄り東西約 2 町、南北約 2 町のエリアに集約され、その内部を道路が東西に貫き、北から西に流下する水路と南端を流下する河川に囲まれる形で居住域が形づくられている。明治期の集落居住域とその周辺の土地利用の状況を示す(図 12-1)注 16)。

図 12-2 (1977 年)、図 12-3 (1993 年) にみるように、昭和 30 年代中頃から工場立地が進み、農地がまとまった単位で転用されている。昭和 50 年代には、1カ所以外全て閉鎖あるいは移転し、その後 1990 年代初めまでに新しい住宅団地へと生まれ変わっている (図 12-3)。また居住域南側では土地区画整理事業が行われている。道路については、1961~1977 年に整備された道路は居住域を貫く中筋道という道路と工場へのアクセス道路であり(図 12-2 濃いラインの部分)、1977~1993 年は、ほとんどが住宅地開発に伴うものである (図 12-3 同)。

居住域とその周辺を見ると、1977 年時点 (図 12-2) においては、北側に隣接する農地 (小字「屋敷田」、小字名は図 12-1 参照) の部分が一部宅地化されているが、それ以外、既存の居住域の中に納まっている。1993 時点 (図 12-3) では、居住域東側 (小字「中東浦」) で住宅地開発が行われているが、既存の居住域の形態は大きく変わっていない。道路については、北西部において周囲からアプローチする二つの道路整備が行われ、居住域境界部で外からのアクセスが向上している。一方、居住域内部の道路は、道路台帳付図によって確認すると、中筋道から日吉神社に至る道路以外、2m 以下で昔から変わっていない。

今日の状況 (図 12-4) を確認すると、居住域北側 (小字「屋敷田」)

図 11-2
1961 (昭和 36) 年

図 11-3
1977 (昭和 52) 年
(集落全体)

図 11-4
1993 (平成 5) 年

図 11-5
2012 (平成 24) 年

図 11 北中小路の居住域とその周辺の変遷

において道路整備がされ住宅地開発がされている。それ以外、居住城南側で新たな区画整理事業が行われ、市街地が拡大してきている。

また、条里地割との関係に着目すると、「集落居住域の上手からの用水を取り入れ、下流に流す水路」や「神社周辺、その北東部（水の流れの上手）の農地」などがよく保全されている。都市化が進んでも、まとまった農地が存在し、農業（水田）が続けられる限り、用水を配分する機能は保持されており、条里地割の骨格は変わらないことを示している。

4-3 まとめ

以上、2つの集落に共通する特性として、昭和 30 年代中頃まで集落の形態は明治期から大きく変化していない。また昭和 50 年代はじめまでは工場立地や宅地開発により農地の転用が進み、居住域内部では住宅の建替え・新築が数多く行われているが、既存の居住域の部分の形態はほとんど変わっていない。その後についても、同様の傾向が見られる。その要因として、一つは居住域を囲む水路が良好に保全されていることが挙げられる。これらの水路は、上流から

ら下流へとつながる一体的な農業用水の水利システムに組み込まれており、周辺の都市化が進展しても、その機能は継続して保全されていく構造になっている。

道路について、居住域内部は昔からの狭い道路が多いが、居住域の周辺部では一部拡幅され、外とのつながりや周辺部からのアクセスが向上している。その他、新しい幹線道路の整備や住宅地開発が条里地割の枠組みに沿う形で進展しており、既存の集落部と新市街地がうまくつながってきている。

これらの水路と道路の条件に加えて、条里地割に規定された集落の「集落面積（農地＋宅地）」と「居住域面積（宅地）」の割合（農地と宅地の形状や面積バランス）や居住域における住戸数（各宅地の規模水準）が、結果的に程良いバランス・水準であったがゆえに、さらには、居住域内部の住家の主要な建替えが昭和 50 年代はじめまでに完了し、今日まで伝統的な様式を継承していることから居住域の空間構成を大きく変えることなく近代化や都市化の圧力を受け止めることが出来たのではないかと考えられる。

5. 全体まとめ

本稿で得られた知見を以下にまとめる。

- ① 野尻にみられるように居住域内部の変化の特徴は、敷地単位では、住家の規模拡大と農業の機械化による屋敷の外部空間の縮小、小家・ハナレの建替え等による建て詰まり化である。居住域全体では、境界部での道路整備が進むことで、これまでの外に閉じていた形態から外に開く形へと大きく変化している。また近年、周辺部へのにじみ出しがみられ、従来の枠組みの中だけでは収まりきらなくなってきた。
- ② 共通して昭和30年代中頃まで、集落のほとんどが農家であり戸数も一定で安定した状態が続いてきたことにより、地域環境は明治期より大きく変化しておらず、グリッドパターンの道路、水路による条里地割の区画割と居住域が集約した集村の形態がよく保持されている。その後も、市街化されたところを含め、条里地割の骨格は全体にわたってよく保たれている。その要因として、一つは新しい幹線道路や住宅地開発が条里地割の枠組みに沿う形で進展しており、既存の居住域の空間構造を保持しつつ新市街地とつながっていていること。二つ目は、水路が良好に保全されていること。特に、北中小路のように居住域を囲む水路が保全されていること。三つ目は、居住域内部の住家の建替えが比較的早くに一時期まとまって行われたため、伝統的な様式が今日までよく引き継がれていることが挙げられる。
- ③ また近年、農家数が減少し、世代交代等により農業を続けていくのが難しくなっており、農地の保全や良好な土地利用が課題となっている^{注22)}。今後は、農業用水を通じて集落同士がつながっているため、一つの集落だけでなく、より広域的にとらえて農地を保全し、歴史的に形成されてきた条里地割の形態を保全・継承していくことが必要である。国史跡の指定を受けた伊勢遺跡^{注23)}なども保全面で効果が期待されるところである。これまで条里地割の枠組みのもと、まとまった農地を保持し、居住域の空間構成を大きく変えることなく、伝統的な集落空間が一定程度維持されてきた。改めてその意義を見つめ直し、都市農業や都市構造をどうするのか、真剣に考えるべき転換期にさしかかっている。

謝辞

調査にあたり、野尻集落の住民のみなさんには多大なるご協力をいただきました。また栗東歴史民俗博物館、栗東市、守山市の関係機関の方々にはお世話になりました。記して感謝の意を表わします。

注

- 注 1) 文献 1)
- 注 2) 文献 2)
- 注 3) 文献 3) 他
- 注 4) 文献 4) 他
- 注 5) 文献 5)
- 注 6) 文献 6)
- 注 7) 郡ごとに復元された分布図が服部昌之によってまとめられ、文献 7)に掲載されている。また圖場整備以前の条里遺構が典型的な形として残っている集落についての足利健亮らの研究・文献 8)をはじめ、野洲川下流域における研究成果が草津市史、栗東町史に掲載されており、それぞれの該当部分を高橋誠一、金田章裕が執筆している。
- 注 8) 文献 9)
- 注 9) 文献 10)、11)において、調査結果の概要報告を行っている。
- 注 10) 野尻集落で大工を営む居住者へのヒアリングでは、「建築のピークは 40 年代に入ってオイルショックの 47、48 年頃まで。50 年くらいまでにだいたいが建替わった」という話を聞いている。
- 注 11) 野尻については文献 12)、伊勢については文献 13)による。北中小路については、文献 14)に昭和 61 年 3 月調査時点の集落図が示されている。
- 注 12) 文献 15)に、「昭和 29 年までに建設された道路」、「昭和 30～36 年に建設された道路」、「昭和 37～47 年に建設された道路」、「昭和 48～62 年に建設された道路」の時代区分ごとに道路整備状況が示されており、凡そ把握できる。一部、北中小路の居住域内について、把握が難しいところがある。道路の現況について、野尻と北中小路は「栗東市道路台帳附図」(2012 年 3 月)、伊勢は「守山市道路台帳附図」(2011 年 9 月)による。
- 注 13) 栗東町農協撮影 1990/9/5 野尻自治会館蔵
- 注 14) ゼンリン住宅地図 栗東町 2000 (1999 年 12 月発行)／栗東市 2002 (2002 年 1 月発行)、2007.12 (同発行)、2011.12 (同発行)
- 注 15) 栗東町(町制施行は昭和 29 年 10 月、市制施行は平成 13 年 10 月)は、昭和 33 年には都市計画法の適用を受け、38 年に用途地域指定を行っている。昭和 43 年都市計画法が全面改訂され、昭和 45 年 4 月には大津湖南都市計画区域として、町全域が都市計画区域となり、同 47 年 7 月に市街化区域と市街化調整区域の線引きがなされている。
- 注 16) 文献 1)より
- 注 17) 2008 年における新たな変化は外観形態から捉えたものである。
- 注 18) 他に No.7 の前住宅(明治期築)、No.19 の前住宅(昭和初期以前築)、No.34 の前住宅(昭和 31 年築)は縁側がなく、No.36 の前住宅(昭和 20 年以降築)は当初縁側がなく、昭和 43 年に縁側を増築。また、No.15 の前住宅(江戸期築)は、昭和 14 年の改装で典型例と同じくザシキ部分に縁側を増築。No.27 の前住宅(明治初期以前築)もザシキ部分にだけ縁側があった。また、栗東歴史民俗博物館にこの地域の霊仙寺にあった旧中島家住宅が創建当初(明治初年と推定)の姿に復元移築されているが、縁側はついていない。同住宅は、幾度もの改修および修理が行われており、解体調査(昭和 61 年)の測量図では縁側がついている。
- 注 19) 住宅は南北配置で敷地西側に寄って建てられ、ニワが東側に広くとられ、東および南からアクセスするのが一般的で、西に閉じ、東に開かれた屋敷配置となっている。
- 注 20) 文献 12)や居住者ヒアリング調査より
- 注 21) 図 13 に 1975 年の集落図を示し補足する。1961～1975 年に建替え、新築された建物を網掛している。居住域内における世帯数は 1970 年の住宅案内図で 43 軒あり、うち 16 軒(37.2%)が住家の建て替えを行っている。他、新築が 3 軒、付属家の建替えもかなり行われている。その他、ブロックや敷地割の形態は変わっていない。居住域周辺では、周辺の農地への住宅のにじみだしが一部みられるものの、大きな変化はみられない。また、西側(小字「縁田」)、東側(小字「又兵衛田」)で農地が大区画に変わっており、住宅宅地整備が始まろうとしている。
- 注 22) 野尻においては、現在、集落西側の農地の一部が埋め立てられているところが出てきている。
- 注 23) 伊勢町を中心に守山市阿村町、栗東市野尻にかけて弥生時代後期の巨大な集落遺跡が広がっていることが明らかとなり、2012 年 1 月、国史跡

の指定がされた。居住域の北東部の農地 1.5ha が保全地区となり、守山市では 2012、2013 年の 2 カ年で伊勢遺跡保存管理計画を策定中である。

参考文献

- 1) 秦憲志 桜井康宏：近江平野野洲川下流域条里地割における用水系統と集落居住域形成 ―近江平野野洲川下流域における条里地割と平地集落の空間形成に関する研究 その 1―、日本建築学会計画系論文集、No.659、pp43-51、2011.1
- 2) 秦憲志 桜井康宏：典型集落・野尻にみる明治中期の家屋敷の状況と居住域の空間構成 ―近江平野野洲川下流域における条里地割と平地集落の空間形成に関する研究 その 2―、日本建築学会計画系論文集、No.675、pp1061-1068、2012.5
- 3) 秦憲志、玉置伸佑：明治前期における滋賀県の農村集落の姿(2)―集落の空間要素とその典型規模、日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2 分冊、pp423-424、1999.9
- 4) 牛島朗、菊地成朋：柳川市両開地区の集落形成プロセスと空間構成原理―有明海沿岸地域における干拓村落の展開 その 1―、日本建築学会計画系論文集、No.632、pp 99-106、2008.10
- 5) 麻生美希、増原美樹、佐藤睦美、西山徳明：農村集落における空間構成の変遷と景観保全の課題 岐阜県大野郡白川村荻町を対象として、日本建築学会計画系論文集、No.646、pp2637-2645、2009.12
- 6) 山崎寿一：能登半島地震被災集落・道下における通世代定住と非現住世帯の空地問題―『昭和絵図』以降の居住動向と集落変容に着目して―、日本建築学会計画系論文集、No.657、pp2599-2605、2010.11
- 7) 「角川日本地名大辞典」編纂委員会：角川日本地名大辞典 25 滋賀県、1979
- 8) 足利健亮：吉田地区の条里遺構 「草津市吉田の条里景観保存地区の歴史地理学的調査報告」所収、1974
- 9) 山崎芳郎：近江湖東平野における条理空間について 農村空間の史的形成過程に関する研究(1)、日本建築学会計画系論文報告集、No.429、pp129-139、1991.11
- 10) 秦憲志、秋山文子、玉置伸佑：滋賀県湖南地域野尻集落の集落空間に関する研究―明治中期の村屋敷の状況と屋敷配置について―、日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2 分冊、pp.727-728、2001.9
- 11) 秋山文子、秦憲志、菊地吉信、玉置伸佑：滋賀県湖南地域野尻集落の農村住宅に関する研究、日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2 分冊、pp.735-736、2001.9
- 12) 野尻区：栗東野尻の歴史、1988
- 13) 伊勢町自治会：伊勢町民誌、2001
- 14) 栗東町史編さん委員会：栗東の歴史 第四巻 資料編 I、1994
- 15) 栗東町史編さん委員会：栗東の歴史 第三巻 近代・現代編、1992

図 13 1975 (昭和 50) 年 北中小路の居住域とその周辺

(2013 年 6 月 10 日原稿受理、2014 年 1 月 17 日採用決定)